

とうきょうすくわくプログラム 2024 年度活動報告

【テーマ】

- ① たんぼビオトープの実践
- ② STEAM 教育の充実（樹木・生物・かいこの一生をより身近に感じる）

【テーマの設定理由（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）】

- ① 園庭にビオトープ、築山、800 本の樹木などがあり、毎日子ども自身が体験からの問いをサークルタイムなどで分かち合っている。5 歳児は毎年園外にて田んぼ活動を実施しているが、園内田んぼをつくることにより、日常の中で稲の育ちや生き物の観察を年間を通して日常的に子どもたちの気づく機会をより一層増やすため。
- ② 自然が身近な環境であり、収穫した野菜や生き物を絵に描くことや重さを量ることは日常的に行っている。さらに光を通してみたり、拡大して観察したりすることで子どもたちの視点や発見に繋がる。また、2 年前保護者がカイコの原種を園に持ってきたことをきっかけにカイコの養蚕を始め、カイコの生長や変化の中から大きさや色の違いに気づいて、子どもたち自身が飼育の中で多くの発見を得たいため。

【活動スケジュール】

- ① ビオトープを掘り起こし枕木で2つの田んぼの形を作成し、その後近隣農家さんにいただいた畑の土をもとに土づくりし、園児と田植えを行う。稲の育ちや生き物の観察を行いながら秋ごろ稲刈りをし、脱穀、粃摺りも園内で行い、収穫したお米を実際に実食し、味わう。
- ② 園庭の桑の葉を使用してカイコを飼育。カイコの育ちを観察し、繭や成虫への成長過程を日々観察。繭から糸を紡ぐ際、近隣の小学校と活動していく。

【活動のために準備した素材や道具、環境の設定（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）】

- ・パソコン、ライトテーブル、園内の大型モニター等の道具の設定や図鑑など。
- ・脱穀、粃摺りは機械を使用しなくてもできるよう、牛乳パックやすり鉢を使用。

【探究活動の実践】

- ① 地域の農家さんより畑の土を分けていただき、園児と共に土づくりを行った。うるち米の苗を園児と共に田植えし、その中で、台湾の幼稚園とオンラインで園児が収穫の時期の違いや田んぼに来る生き物について質疑応答した。稲の育ちの中で、稲の色や花、実について興味を持ち、収穫までの間に取りに食べられてしまったという経験談を聞き、対策を自分たちで考えて行った。また、田んぼに来る生き物について気づき、それらを身近に感じていった。
- ② カイコの成長過程で繭から糸を紡いだり、園庭の桑の葉の違いを感じてどれ位あげたら良いのかをカイコの様子を見ながら実践していった。カイコにゆかりのある近隣の小学校と共に糸紡ぎの活動をさせていただき、その際に学んだ方法を園でも実践し、糸枠を使った紡ぎ方や牛乳パックでの紡ぎ方等様々な手法を行った。

【活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり（活動の内容、活動中見られた子どもの姿、保育者との関わり等）】

- ・土を作る過程で、園庭の土と田んぼビオトープの土の感触の違いに気づいていた。
- ・稲の育ちに期待する中で、「花が咲いている」「実がついた」「もうとれる？」と育ちそれぞれの段階で思いを子どもたち同士や保育者と共有していた。
- ・虫がついていて、稲にとって良い虫なのか害虫となるのかをつながりのある台湾の幼稚園へ質問していた。また、鳥に食べられてしまったという台湾の方からの経験談から、どうやったら鳥に食べられないかをサークルタイムで考え、園にある網を使用してすぐに対策を行ったことで、「これでもう食べられないですむね」と安心していた。
- ・脱穀や粃摺りを手作業で行うことで、使用する道具や実際にやってみてのポイントなどを自分たちなりに見出していた。

【振り返りによって得た保育者の気づき】

ビオトープから園内田んぼづくりには保護者・地域の方々も参加した。年間を通して田んぼの育ちに興味を持つ方々がとても多くなった。園内田んぼでは、より身近で観察できるようになり、子どもたちのお米に対する興味の広がりが深まっていったことを実感できた。田んぼに来る生き物の生態をパソコン・デジタルカメラなどの道具を使用することでじっくり観察することができていた。稲の収穫に必要な道具を機械に頼らず自分たちの身近な物で行うことを知る機会になり、日々の生活の中でお米やそれ以外の食への興味が高まったと実感している。